

◆ メンデルスゾーン／序曲「静かな海と楽しい航海」

『ファウスト』、『若きウェルテルの悩み』などで知られるドイツの文豪、ゲーテ。彼の作品を愛し、曲を付けた作曲家は多いが、メンデルスゾーンもその一人であり、同時にゲーテに愛された作曲家でもあった。ゲーテがメンデルスゾーンを高く評価したきっかけは、ゲーテの友人であり、かつメンデルスゾーンの音楽教師であったカール・フリードリヒ・チェルターがメンデルスゾーンをゲーテに紹介したことに始まる。当時メンデルスゾーンは12歳、ゲーテ72歳。既にいくつかの室内楽曲を作曲していた幼い作曲家を、初老の文豪は甚く気に入り、「モーツァルトの再来」とまで評した。以降、ゲーテが82年の生涯を終えるまでにメンデルスゾーンはゲーテのために室内楽曲を作曲したり、ゲーテのもとを訪れて様々な作曲家の曲をピアノで演奏し、ゲーテを喜ばせた。同じくゲーテの作品を愛し、ゲーテと同じ時代に生きた作曲家の中には、ゲーテの戯曲『エグモント』に附随音楽を書いたベートーヴェン、『魔王』をはじめとする数々のゲーテの詩に付けて歌曲を書いたシューベルトがいるが、ゲーテはベートーヴェンの難解な性格を受け入れられず、それゆえに彼の作品を理解しようとはしなかったというし（ベートーヴェンの交響曲第5番をピアノで弾いてゲーテに聴かせ、その凄まじさに気づかせたのはメンデルスゾーンであった）、シューベルトはゲーテの詩に付けた曲をゲーテに二度送っているが、それに対してゲーテは返事すらしなかったという。これらのことから、メンデルスゾーンがゲーテにとって特別な作曲家であったことが読み取れる。

本日演奏する『静かな海と楽しい航海』は、ゲーテの二編の対をなす詩、『静かな海』と『楽しい航海』から靈感を得て書かれた演奏会用序曲である。コントラバスによる旋律で始まる冒頭の *Adagio* は、波が全く立たない海の深い静けさを表し、舟乗りたちはただひたすら広がる水面に不安を感じる（『静かな海』）。フルートのソロに続く *Molto Allegro e vivace* では霧も晴れ、風の神エオロスが不安の鎖を解き放ち、風が立つ海原に活気づいた舟乗りたちは陸地が見えた歓びに湧く（『楽しい航海』）。港へ到着したことをトランペットが華やかなファンファーレで告げた後、最後に『静かな海』のテーマが現れ、再び海は静けさを取り戻す。

メンデルスゾーンが最初にこの曲を作曲したのは1828年。当時メンデルスゾーンは一度も海を渡ったことはなく、翌年の1829年にベルリンからロンドンへ向かう際、初めて航海というものを経験した。このロンドンへの演奏旅行の際に訪れた地で、その風景に心を奪われて書かれた曲が、かの有名な『フィンガルの洞窟』である。海という題材を共通とし、ほぼ同時期に構想を得て作曲されたこの二つの序曲だが、残念ながら知名度に関しては『静かな海と楽しい航海』の方が劣っているようだ。しかし、純粋に風景を描写して書かれた『フィンガルの洞窟』に対して、『静かな海と楽しい航海』では風景のみならず、舟乗りたちの不安や困惑、期待や歓びといった人間の感情も同時に描かれており、特に『楽しい航海』での高らかな歓びの連続は類を見ない高揚感を感じさせる。メンデルスゾーンは水彩画を得意としたというくらいであるから絵画的なセンスにも長けていたであろうし、父親の教えで幼い頃から文学に接しており、ゲーテの詩を深く理解するだけの文学的な素養も十分にあった。この曲は、そんなメンデルスゾーンの多彩な才能が発揮された曲であり、『フィンガルの洞窟』にひけを取らない傑作と言えよう。余談ではあるが、奇しくも前述の二人の作曲家もこの詩に音楽を付けており（ベートーヴェンは同名のカンタータを書き、シューベルトは『静かな海』の詩に歌曲を付けている）、これらを聴き比べてみるのも一興かもしれない。

初めて聴いた時からこの曲に魅せられてきた筆者にとって、この曲を演奏するのは10年以上前からの夢だった。そのような夢の曲を、ボッセ氏という素晴らしい指揮者のもとで演奏できることは至福の歓びである。また、この曲が夢の曲ではない団員にとっても、ボッセ氏を迎えた今回の演奏会に参加できることはこの上ない歓びのはずだ。そう。もし本日の演奏が歓びに溢れたものになっているとしたら、それは我々ブルーメンの、ボッセ氏と再び共演できることの歓びの証でもあるのだ。（J.N.）

◆ モーツァルト／交響曲第40番 ト短調

1788年、わずか二ヶ月間で書き上げた三大交響曲の中で二番目、たった二曲しかない短調（いずれもト短調）の交響曲の二番目である。記録が残っていないためモーツァルトの生前には演奏されなかったと言われていたが、最近では少なくともこの40番だけは演奏されていたらしいという説が有力である。1791年にはウィーンでサリエリによって演奏されたと推測されている。

俗に音楽の三要素という旋律、和声、リズムが挙げられる。いわゆる有名な作曲家はこの中の少なくとも一つには秀でているのだが、モーツァルトは特に旋律に秀でた作曲家と言われている。実際のところオペラには名作が並び、歌曲や合唱曲にも名曲が多い。彼の音楽は器楽だけのものでも旋律の中に常に歌を感じ、オペラのような場面転換が感じられる。モーツァルトを演奏するにはこういったことを楽しみまた表現できるようにしなければならないのではないかと思う。この交響曲も冒頭の旋律は一度聴いたら忘れられないものであるし、場面の転換も鮮やかである。そのようなところを楽しんでいただけたらと思う。

第一楽章 *Molto Allegro* ト短調 ソナタ形式

荘重な序奏でもなく、いきなり主題が始まるでもなく、中低弦の伴奏が一小節だけ先行して曲は始まる。この一小節の前奏が不安感を出しながら、曲の流れを作り出す。展開部、再現部では逆に主題が先行し、伴奏は遅れて入ってくる。細かい違いではあるけれど、演奏していても面白い。第一楽章の主題はため息のモチーフとも言われるが、この主題は全曲のいろいろなところで登場する。

第二楽章 *Andante* 変ホ長調 ソナタ形式

非常に美しい緩徐楽章だが、美しく流れるだけでなく、細かい音符によるリズムや突然の転調など不安感も伴っている。

第三楽章 *Menuetto: Allegretto - Trio* 複合三部形式

メヌエットだが、本来の舞踏音楽からは少し外れている。冒頭は3小節単位となっており、ヘミオラを含んだ2(拍)+2+2の大きな3拍子と1+1+1の小さな3拍子の組み合わせで変拍子ではないかと思わせる、不思議な雰囲気をもつ曲。少し安らぎを感じる中間部も4小節、8小節単位という常識的な構造からは外れていて面白い。

第四楽章 *Allegro assai* ソナタ形式

筆者はピアノソナタイ短調 K. 310 の終楽章に雰囲気が似ていると思う。ただしピアノソナタは中間に一瞬安らぎがあるが、こちらは長調である第二主題も何か不安な感じが残る。聴き所は展開部の転調で、古典といわれる音楽の中ではかなり斬新なもの。変ロ短調から始まって、ト短調からはかなり遠い嬰ハ短調まで進み、順次転調しながらト短調へと戻って再現部へと進む。再現部では第二主題も短調となりそのまま終わる。

ボッセ氏との練習の際に「*Molto Allegro* と *Allegro Assai* という表現はどちらが速いのか」という話をされたことがある。どういう解釈で本番に臨むことにしたのかは演奏でご確認いただきたい。（K.O.）

◆ シューベルト／交響曲第2番 変ロ長調

シューベルトは 1797 年、ウィーン郊外に生まれた。幼い頃から父親の手ほどきを受け、家族とのアンサンブルで音楽に触れていた彼の楽壇デビューは 11 歳の頃であった。時の宮廷楽長・サリエリのお眼鏡にかなない、宮廷礼拝堂児童合唱団の試験に合格したのだ。当時からシューベルトの親友だったというシュパウンの言葉を引用しておく。「シューベルトはハイドンのアダージョ楽章には深く心を動かされ、モーツァルトのト短調交響曲については、『なぜか全身が震えてくるよ』と言った。『この曲のメヌエット楽章は素晴らしく、中間部のトリオは天使が歌うようだ』とも言った」

第2交響曲が作曲された 1815 年、18 歳になったシューベルトは変声期を迎えて声楽隊を去り、いよいよ作曲家として身を立てる決意を固めた。この一年間には「野ばら (D 242)」「さすらい人の夜の歌 (D 227)」などの著名な歌曲を含む 200 曲を超える作品が産み出されている。一方で、いわゆる「まっとうな」教師だった父親から定職に就くよう強く勧められていたシューベルトは、自らにほとぼしる楽想との間の葛藤に苦しみ続けることとなる。

日常的世界の現実の時間は 灰色の時間だ
音楽という優しい芸術は この灰色の時間から私を救い上げ
心を温かい愛に燃え上がらせ
よりよい世界をひらいてくれる

前述のシュパウンによる詩「若者と死」(D 545) である。シューベルトの生活美学、芸術への信仰告白に他ならない。

第一楽章 Largo - Allegro vivace

モーツァルトの 39 番を意識したとも言われる壮麗な序奏で幕を開ける。弦楽器にあらわれる主題はあくまで軽快である。

第二楽章 Andante

「子守唄」を連想させる、リート風の幸福な主題による変奏曲。この上ない愛らしさの中に哀しさも織り込まれている。

第三楽章 Menuetto: Allegro vivace - Trio

メヌエットと題されているが、冒頭から短調かつリズムカルなスケルツォ風の楽章。シューマンの第一交響曲に影響を与えていると感じるのは私だけだろうか。

第四楽章 Presto vivace

ごく短い前奏を備えた主題がまず弦楽器のみで奏され、管楽器を加えて喜びを爆発させる。

(I. T.)